（様式4ー1）

中間報告書

補助事業名	佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート　～オーラルコミュニケーションを核としたアートマネジメント人材育成事業 （SMAART：Saga Mobile Academy of Art）		
事業期間	令和5年4月1日～令和6年2月29日	大学名	国立大学法人　佐賀大学
実施概要	活動① アートを学ぶ：音声メディアを活用した美術教育プログラムの検討・開発・試行 高校6校の美術教育関係者（教員・生徒）にヒアリング＆ディスカッションおよび試行的実践（表現・鑑賞）を重ねながら、令和6年度の教育プログラムに向けての教材開発に取り組む。現在関係者間での日程調整等を行っており順次進めていく。 活動② アートを伝える：わかばリポーターによる音声コンテンツ作り 「話し言葉」でアート情報を伝える人材を育成する連続講座を行う。メディア研究者とラジオディレクターによる指導・助言を受けながら、受講生が各自で音声コンテンツを作成。9月末までに全6回の講座のうち3回の講座を開催した。 活動③ アートを届ける：耳で聴くアート準備室 ③-1.ゲスト講師によるオンラインレクチャー…令和6年度「耳で聴くアート」展企画の参考のために、ゲスト講師から過去の活動事例や今後のアイディアについて聞く。レクチャー音声のみアーカイブ配信。9月末時点で計6回のうち3名分の講座と追加でイントロダクション編を収録し、計4本の動画を公開している。 ③-2.わかばキュレーターによる企画会議 計6回…ラジオディレクターによる監修のもと、受講生が「耳で聴くアート」展キュレーションの可能性をめぐるディスカッションおよび試行コンテンツ作成に取り組む。計6回の講座のうち9月末時点で2回の講座を開催した。 ※　詳細〈講座名，講師名，コマ数，公演名，会場名，公演回数等〉は下部の各活動欄に記入してください。		
共催者名・後援者名・協賛者名等とその役割	協力：佐賀大学美術館（広報協力） 後援：CROSS FM（広報・技術支援・作品配信）、LOVE FM（広報・技術支援・作品配信）		

全活動合計	計画	実績	差	計画と実績の差異理由
来場者	30	489	459	活動②・・・事務補佐員の採用が当初より遅れて、受講前に十分な広報期間が取れなかった。 活動③-1・・・昨年の音声コンテンツの再生回数を参考に設定したが、10/17時点で4動画計489回再生されている。 活動③-2・・・講座の充実度を重視し、受講生の定員を6名に絞り募集した。
育成対象者	18	10	-8	

育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業職員	その他
	人数	2	0	0	2	0	5	1

育成対象者具体的な職業	活動②・・・民間企業の企画営業，即興音楽活動家，学生 活動③・・・イベント企画担当，広報担当，大学美術館学芸員，大学事務，民間企業の企画営業，広告代理店営業

アートマネジメント人材育成目標	申請時	達成状況
	活動① 音声メディア（IT機器・ネット機器ほか）を活用した美術教育を担える美術教員、美術関連への進学・就職に関心を高め進路を検討する高校生…将来アートマネジメント人材が活躍できる社会の土壌作りのために、未来の美術享受者のアートリテラシー向上を図る。 活動② アートの魅力を音声で伝えるコンテンツを作成・発信できるメディア人材（ディレクター、パーソナリティ、リポーター他）…ネットにより気軽に情報発信できる状況にあってファクトとフェイクを峻別し適切に発信できる人材を育成。 活動③ 音声メディアを主体とした美術展の企画・発信ができるキュレーター…博物館法改正・マスメディアの弱体化・コロナ禍以降、刻々と変わる美術館の状況をふまえ柔軟にキュレーション活動の新たな領域を模索・展開できる人材を育成。	本プログラムは、「音声メディアを中心とした美術作品発表・鑑賞のあり方を探り、発信できるアートマネジメント人材」の育成を目標としている。 当大学は全国の総合大学で唯一美術館を有しており、学内共同教育研究施設として連携を取っている。また、「地域の課題に向き合い、芸術によって地方・地域創生を果たす人材養成」を目的に2016年に発足した「芸術地域デザイン学部」の教員や学生，作品等と協力しながら各活動を進めている 活動② メディア研究：忠聡太氏とラジオパーソナリティー：鶴田弥生氏を講師として招聘し、アートの魅力を話し言葉で伝えることが出来る人材を育成中である。講座の中で、適宜助言・指導を受けながら適切な情報リテラシーを備えるリポーターを育成している。 活動③ ゲスト講師レクチャーの動画を受講生にも聴講してもらい、キュレーション活動が抱える問題点等を共有し、一部、芸術地域デザイン学部の教員・学生の協力を得て受講生各自が実験的コンテンツの作成に取り組んでいる。

事業の社会的な役割、効果	申請時	達成状況
	・聴覚限定＆ネット活用のキュレーションモデルが確立されることで、地理的・経済的・身体的・精神的ハンディキャップを持つ人々に対してアートへのアクセシビリティが高まる。 ・新たな活動領域を模索・実践できるタフな人材を育成することで美術館のレジリエンスやサステナビリティが高まる。 ・情報過多の時代にあってアート体験を「耳で聴く」ことに限定することによって、1）受け手の想像力がより刺激され、2）過剰な視覚情報に惑わされずアートの核心部分を届けられ、3）人と集まったり繋がったりする体験とは逆に孤独な中で静かに目を閉じて体験することでより深く本質的・根源的な芸術体験を促せる。	・本事業の音声コンテンツはインターネットでの一般公開を予定している。ゲスト講師レクチャーの動画は先行して配信しており、どの動画の再生回数も現時点で100回は超えており、受講生（＝6名）の人数以上に再生されている。いつでも，どこでも作品を楽しめる状態にしているため、一定のアクセシビリティを確保している。 ・本事業にて作られる音声コンテンツは、視覚情報はほぼ無しで公開を予定している。聴覚のみで、一対一の芸術体験を促している。

事業に関して学会発表、メディアでの掲載実績や予定	活動②の成果…CROSS FMにて放送予定 活動③-1の成果…ゲスト講師レクチャーの動画をオンラインでアーカイブ配信中（公式サイト，YouTube） 活動③-2の成果…LOVE FMにて放送予定
事業で得た課題や経験、今後の活用方法	今回、事業を進めていく上での課題として想定していた講座のレベルと受講生の理解度に差があることを実感している。個別に受講生のフォローを行いながら、受講生の個性も生かした音声コンテンツ作りを進める。成果物の音声コンテンツは、実際のラジオ電波（活動2はCROSS FM・活動3はLOVE FM）にて放送し、来年度以降開催予定の「耳で聴くアート」展に向けて課題や反省点等を抽出する。

担　当　者 所属・氏名	芸術地域デザイン学部 事務長　浅岡　宏信	電話	0952-28-8349
		E-mail	geisomu@mail.admin.saga-u.ac.jp

活動①

講座名 企画名	アートを学ぶ：音声メディアを活用した美術教育プログラムの検討・開発・試行							
講師名 出演者名	近隣高校の美術教員（6名程度）、若林朋子（立教大学21世紀社会デザイン研究科特任教授、東京）、濱田庄司（ギャラリーコンパ、福岡）							
日時					コマ数			
会場・教室	近隣の高校					計画	実績	差
					来場者			0
					育成対象者			0
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業社員	その他
	人数							
実施概要	※現在関係者と日程調整中							
アートマネジメント人材育成目標	申請時					達成状況		
	本事業の3つの活動のうち最も長期スパンでの人材育成。 大学から優秀なアートマネジメント人材を輩出するためには芸術大学やアートマネジメント関連学科に進学したいという受験生の確保とその質向上とが必要。またアートマネジメント人材が仕事として社会で活躍していくためには社会全体に一定数の芸術理解者・享受者が必要。 この活動①では次年度に展開する美術教育プログラムを現場の声（高校教員及び学生）をもとに開発しながら高校美術教員のスキル向上を図るとともに、高校生たちの美術分野への進学・就職への関心促進を図る。高校での美術鑑賞教育を充実させることで未来の芸術享受者たる高校生たちのアートリテラシー向上を図り、将来アートマネジメント人材が活躍できる社会の土壌を準備する。					※現在関係者と日程調整中		
活動で得た課題や経験、今後の活用予定								

活動②

講座名 企画名	アートを伝える：わかばリポーターによる音声コンテンツ作り							
講師名 出演者名	鶴田弥生（ラジオパーソナリティ/ディレクター、北九州）、忠聡太（メディア研究者/福岡女学院大学講師、福岡）、若林朋子（立教大学21世紀社会デザイン研究科特任教授、東京）、濱田庄司（ギャラリーコンパ、福岡）							
日時	令和5年7月9日(日), 8月19日(土), 9月9日(土)				コマ数	7/9 3時間, 8/19、9/9 各6時間		
会場・教室	7/9　佐賀大学芸術地域デザイン学部　A101講義室 8/19　福岡市美術館コレクション展示室およびレクチャールーム 9/9　佐賀大学芸術地域デザイン学部　A101講義室					計画	実績	差
					来場者			0
					育成対象者	10	4	-6
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業社員	その他
	人数	2					1	1

実施概要

「話し言葉」でアート情報を伝える人材を育成する連続講座を行う。メディア研究者とラジオディレクターによる指導・助言を受けながら、受講生が各自で音声コンテンツを作成。
初回の7月9日に全体のオリエンテーションとして、今後作成するコンテンツの企画会議を行った。
2回目の8月19日は、福岡市美術館にて固定課題の取材を行った。はじめにコレクション展示室の作品を鑑賞しそれぞれが気になる作品をピックアップし、その作品を紹介する音声を録音した。それぞれの音源を全員で聴いて意見交換を行った。
聴取後に再度コレクション展示室の作品鑑賞を行い、受講生それぞれが1回目と2回目の作品鑑賞の違いを感じた。
最後に、会場に用意されたラジオブースにて4人の受講者全員で簡易なトーク番組を録音。お互い思い思いの感想や疑問点を対話形式で順番に進めた。講師の先生方にフィードバックを行って頂き、この音声を編集してくるという課題を持ち帰った。
3回目の9月9日の固定課題発表では、2回目の現地取材を元に各自で作成した課題(音声作品)を全員で視聴した。ラジオでの放映を想定した話し方、聴き方や、音声を収録する際の注意点、編集する際の注意点など講師やテクニカルサポーターから具体的なアドバイスがあり「アートの魅力を音声で伝える」ための有意義な講座となった。

	申請時	達成状況
アートマネジメント人材育成目標	本事業の3つの活動のうち最も短期スパンでの人材育成。 かつて主要マスメディア（新聞・テレビ・雑誌等）に占められていたアート情報発信の機会はインターネットの普及により大きく変わり、現代では大きな組織や高価な機材を持たない個人でもYouTubeやポッドキャストなどを通じてアート情報を手軽に発信できる状況になっている。 今後アマチュアによる情報発信が増えることで、中央集権的ではない親しみある伝え方や多種多様な価値観に立っての伝え方など、かつてないアートジャーナリズムの広がりが期待される一方、アマチュア発信者には身近なところから伝えるに値するアート情報を選り分ける能力、およびファクトとフェイクをシビアに峻別する能力や倫理観がより一層求められる。 以上の前提に立ち、活動②ではアート情報の取材のノウハウや番組制作など実践的スキルを提供し、アートの魅力を音声で伝えるコンテンツを作成・発信できるメディア人材（ディレクター、パーソナリティ、リポーター他）を育成する。適切なアートリテラシーを備えた発信者を増やしていくことで、リスナーのアートへの関心を効果的に高めアートの現場へ足を運ぶ人々の増加を促していく。	・今後様々な媒体(YouTubeやPodcast等)にて音声コンテンツを発表するにあたり、音声を編集しやすくするための音声収録方法や設定・編集方法などを学んでいる。 ・また、実際にアートの現場へ足を運んでもらうことを目的としているため現実的に鑑賞可能な作品、展覧会を取材するように受講生に指導している。取材やインタビューに苦手意識がある受講生には、相手の伝えたいことを引き出せるような質問方法など、具体的に指導をしている。 現在最終的なラジオ番組作成に向けて準備を進めている。 〈アンケート結果〉 7/9 講座の内容：期待以上だった100% 講座のレベル：ちょうどよかった33%・ちょっと難しく感じた33%・難しく感じた33% 8/19 講座の内容：期待以上だった67%・期待通りだった33% 講座のレベル：ちょうどよかった67%・難しく感じた33% 9/9 講座の内容：期待以上だった25%・期待通りだった75% 講座のレベル：ちょうどよかった100%

活動で得た課題や経験、今後の活用予定	前半3回の講座では固定課題に取り組み、企画→取材→収録→編集の一連のプロセスを通して受講生各自の課題や個性を抽出した。残り3回の講座を通し、ラジオ番組のリスナーに「アートの現場へ実際に足を運んでもらう」ことを目的としたラジオ番組を作成し、CROSS FMにて発表する。

活動③

講座名 企画名	アートを届ける：耳で聴くアート展準備室
講師名 出演者名	三好剛平（三声舎代表、福岡）、若林朋子（立教大学21世紀社会デザイン研究科特任教授、東京）、濱田庄司（ギャラリーコンパ、福岡）、毛利嘉孝（社会学者／東京藝大、東京）、川上幸之介（美術家・キュレーター／倉敷芸術科学大学芸術学部准教授）、藤浩志（美術家／秋田公立美大、秋田）、中野仁詞（神奈川県民ホール、神奈川）、椹木野衣(美術評論家／多摩美術大学美術学部教授）、田中みゆき（キュレーター／プロデューサー／アクセシビリティ研究、神奈川）、花田伸一（キュレーター/佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授、佐賀）

日時	③-1　令和5年9月以降順次公開中 ③-2　令和5年9月1日(金), 9月22日(金)	コマ数	③-1　2時間×4回 ③-2　2時間×2回

			計画	実績	差
会場・教室	佐賀大学芸術地域デザイン学部 A101講義室	来場者	30	489	459
		育成対象者	8	6	-2

育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業社員	その他
	人数				2		4	

実施概要	③-1　ゲスト講師によるオンラインレクチャーでは、講師6名のうち9月末時点で3名分の講師の動画を公開している。また、講座の企画に至った経緯などを詳細に説明する「イントロダクション編」を追加で収録・公開した。 なお、この4本の動画については若林朋子氏と濱田庄司氏に聴取して頂き、この講座が目指す方向性や趣旨を理解頂き、ご助言を頂いている。 ③-2　わかばキュレーター講座は、初回オリエンテーションを9月8日に行った。「耳で聴くアート」とは、「キュレーションが抱える課題」とは、など講座の前提となる情報を講師・受講生で議論，共有した。 2回目の講座は9月22日に行い、受講生が考案した「耳で聴くアート」展の企画書の講評会及び議論を行なった。

	申請時	達成状況
アートマネジメント人材育成目標	本事業の3つの活動のうち中期スパンでの人材育成。 昨今の美術館学芸員をめぐる状況を俯瞰するに、博物館法改正によって単館での活動に加え地域や他館・他業種との連携が促され、マスメディア（新聞社・テレビ局）の今後の弱体化やコロナ禍を受けて従来通りの大規模集客展の継続にはもはや限界が見え始めている。学芸員として調査・収集保存・普及というベーシックな活動が重要であることに変わりはないが、一方ではそれだけに留まらず、かつてなく目まぐるしく変化するミュージアムの状況に柔軟に対応しながら新たな活動領域を開拓できる発想力・企画力・実践力が求められている。 その前提に立ち、この活動③ではキュレーションの新たな領域を模索する一つの試みとして、音声メディアを用いた展覧会の企画・発信に取り組める人材を育成する。従来のキュレーションでは作品の実物展示やプロジェクトの物理的な空間をもってアートの「現場」とみなすのに対して、本キュレーションではリスナーの視聴体験そのものをアートの「現場」とみなす。そのことにより美術館の立地による物理的制約に縛られることなくネットを通じてアートの「現場」を提供でき、外出の困難な心身障害者や引きこもり人口に対してもアートに触れる機会を確保できる。さらに大規模集客展や参加型アートプロジェクトが人々の集まりや繋がりを促すのに対して、本キュレーションではアート体験を孤独な中でパーソナルな体験—より本質的で深い体験—として提供できる。このように本プログラムを通じて美術館の活動領域を広げ、キュレーションの領域を拡張していくことで、アートへのアクセシビリティやサステナビリティを高めていける人材を育成していく。	③-1　ゲスト講師によるオンラインレクチャーは一般公開し受講生以外でも聴講出来る環境にしている。動画は受講生の数以上に再生されている。 ③-2　アンケートの結果、難しくはあるが内容は期待以上だったという声が多かった。 〈アンケート結果〉 9/8 講座の内容：期待以上だった75%・期待通りだった25% 講座のレベル：難しく感じた100% 9/22 講座の内容：期待以上だった80%・期待通りだった20% 講座のレベル：難しく感じた100%

活動で得た課題や経験、今後の活用予定	「耳で聴くアート」展の企画・発信が出来るキュレーター育成講座であるが、「耳で聴くアート」の前例がほぼ無いため企画に難航したり、受講生の中でも理解度に差が生じたりしているが、個別にフォローをすることで受講生の理解度に差が生じないように留意している。残り4回の講座を通して実験的コンテンツを作成する。成果物は実際の電波(LOVE FM)で放送し、来年開催予定の「耳で聴くアート」展に向けて課題等を抽出する。